

スイス ゲーテアヌム精神科学自由大学医学部門代表

ミヒャエラ・グレックラ - 博士 公開講座

テーマ：現代における子供の教育と医学

日 時：2003年3月29日 14:00~16:00

メモ：河端

<なぜアライアンスの設立にかかわったのか>

アライアンスへの思いは1990年半ばごろ生じました。世界中のシュタイナー幼稚園連盟の総会がきっかけでした。参加していたのは、小児科医、幼稚園の先生や父兄でした。その中で出てきたのは以下のようなことでした。

確かに私たちの手元にいる子供たちはうまく行っている。しかしそれは一滴の雫でしかない。現代の世界中の子どもの発達状況はひどいものである。文明の発達した国々の80~90%の子供はうまく行っているが、それ以外の国々の母親の死亡率や子供の死亡率はすぐ見て取れるほど高い。フィリピンの子どもの36%は栄養失調、10%はお金持ち、25%はとても貧乏で生存条件以下、あと25%は生存条件の境界線上、他は中流である。このように物質的困窮にある。一方、文明国の10%もドラッグ漬けとかいろいろな問題を抱えており、こちらの方は精神的困窮にある。

われわれには何ができるのか？実際、私たちはなぜ子どもたちのための他の団体と手を繋げないのだろうか。私たちはもっと地域でつながるべきではないだろうか？市長や銀行の人や・・・いろいろな人と。ネットワークとして。

ネットワーク作りのために、意識的に考えなければならないこと、それは、スタート地点をどこにするのかということだった。そして、

場所：シュトゥットガルトとニューヨークを中心として、

人：シュタイナー教育関係者 文化人 学者 子どものことを研究している人たちで集まりを持った。

<会議の内容>

一堂に会して、今までわかっている事実を踏まえ、私たちは子どもたちの明日のために何を願うのか、問題点を書き出してみた。

- 1) 子どもは人類に普遍的な存在。(日本人の赤んぼうをこっそりスイスに連れて行き育てたら一年後はスイスの子どもと同じになってしまう。このように子どもは柔軟で開かれており、環境の影響をすごく受けやすい存在だということ。)
- 2) 子どもは直立、言語、思考を自分から身につける存在。つまり、人間が直立、言語、思考する力は人間の本能ではないということ。(遺伝子の中にはこれらはプログラムされていない。遺伝子の中に組み込まれているのは、模倣 繰り返し 身に付けていく という3つの条件だけ。このように、人間に与えられているのは反射だけであって高次の能力が最初から与えられているわけではないということ。は戦慄に値する事実である。)
- 3) 私たちは子どもにとって何が有益で何が有害かを知っているということ。(数多くのその手の本がそのホールに持ち込まれていた。)
- 4) 実際大切なのはそういう膨大な知識ではなく、子どものために何かをすること。もし、全員が一致して行動を起こすならば3年後には世界の状況は大きく変わっていくだろう。

「世界では多くの子供たちが飢えている。しかし私にはなす術が無い。」このように言うのは簡単である。私たちにできることは、まず、自分たちの地域の中で子供たちに何が起きているのか、学校などを訪問して見てくる。そして、全員が一致してできる必要な事柄を考えてみることであった。

<子どもの成長と発達から アライアンスの一致点>

スライド1) 大脳の断面図うえから 新生児 3ヶ月 15ヶ月 3年目 のもの

新生児は神経細胞は存在しているが、突起を出して絡み合っていない。

3ヶ月は両眼で一致してみる(両眼視)ができるようになったときでシナプスの連繋は複雑化している。

3年目には物事を考え始める。

思考は見ることはできないが、子どもが考え始めたということを私たちはすぐに気づく。子どもにとって衝撃のように起こる出来事があるからである。それは、子どもが自分を一人称で語り始めるという瞬間である。この瞬間まで私たちは記憶をたどることができる。思考がなければ記憶もなく、記憶がなければ意識的思考もありえない。考え始めたときから、子どもは周囲の世界から自分を切り離し始める。考えるということは確かにこれ以前にもあるが、それを意識することはない。そして、意識して考え始めた瞬間から最初の反抗期が始まる。その瞬間はまた、自分を(外の世界から客体化して)守るということを始め始める瞬間でもある。

それゆえ、それまでの生後3年間の乳児には外的な保護が必要なのである。

一致点1) 生後3年間は子どもは守られなければならない。このためにできるだけ質の高い保育所を作る。ネグレクト、栄養の欠乏から子どもを守るため。

私たち人間にとっての喜びは他の人ではなく自分自身が何かができるということ。人間の本性として、子どもはすべてを模倣しやってみようとする。つまり、人間はアクティブに体を動かすことによって知性を発達させていく。午前の講義で大脳の成熟に11年かかるといったが、これは11歳までに運動(体を動かすこと)が必要ということである。

シュタイナー学校では12歳に境界線を引き、子どもの知性を発達させるために11, 12歳までCDやTVを避けるようにしている。自分自身がいろんな言葉で表現できる能力を身につけるまで。音楽をまず学んで、その後外から音が来ると、機械に依存するという危険はなくなるのである。

<この例(のやりとり): ドイツの小さな町での講演会で>

28歳の男性:「私たちが馬鹿にしたいんですか。ITに遅く取り組むとむしろ依存します。アメリカには3ヶ月の乳児のためのコンピューターソフトが存在しているんですよ。」

ミヒャエラ:「シリコンバレーの企業の社長クラスの人たちは小さいときにコンピューターなしで過ごしていたのではないのですか。」

実は質問した彼もまたそういう人だった。その指摘がきっかけとなって、その青年は生き生きして、自分で考え始めたのがわかった。そしていった。

28歳男性:「自分は馬鹿だった。自分も同じだった。」

ミヒャエラ:「コンピューターを0~150まで学ぶのに何年かかりましたか?」

28歳男性：「2～3年ですよ。すごく楽しかった。」

このように喜びや悲しみをともなった感情による記憶は決して忘れることはない。

一致点2) 子どもたちが何でも自分たちの手でできるようにしよう。(後で機械に取って代わられることも。) 機械を子供たちから遠ざけよう。そのために、手足を使った経験ができるプレイパークを作る。これは、創造性を生み出し体験できる場所である。

一致点3) 動物たちとかかわれる場所をつくろう。

ヨーグルトはプラスチックの容器に入って届けられるものであると思い込んでいる子供がたくさんいる。牛を見たことがない。牛乳は牛から搾ることを知らない子どもがたくさんいる。

一致点4) 栄養に注意を払おう。栄養不足というばかりでなく子どもたちの消化器官が学ぶことができるように初めから調理されていないものを与える。

これはどういうことかということ、鉄棒で懸垂するとき上に棒があるほど筋肉を使うのと同じように、生野菜(手を加えられていないもの)であればあるほど消化力が鍛えられるということ。今日の食物アレルギー(耐性のなさ)はこのことと大変関連している。世界中の母の知恵: その土地のもので平地のもの海のものが多い。土地ごとに生態系が異なるから。(私たちヨーロッパの人間が植物全体を食べるのはこれと似たようなこと。)

< 味覚嗅覚と社会性 >

さらに感覚が偏った刺激にさらされ続けることによって、感覚の統合が妨げられている問題は深刻である。一週間マックだけを食べたら味覚嗅覚が偏った刺激を受け続ける。

子どもはさまざまな味を学習し国際的味覚を身につける必要がある。味覚に対する根源的反感に抵抗力を持たせなければならない。しかし好き嫌いがある(子どもの嗜好の偏り)のは自然なことなので工夫が必要である。たとえば「小さじ3杯でいいから食べてごらん。お家にあるスプーンの中で一番小さいのを使っていいから。」など。日本では箸を使うので、同じ3回でも箸の先にちょっとだけならもっと効果的でしょう(笑)。これを通して自分は自分を克服することができるという喜びを得ることができる。

結局マックで食事を続けた16歳の少年に比べて、いろいろな食を体験して育った人は、社会の問題やさまざまな出来事に関して別様の関わり方ができるのである。

ドイツシュワーベン地方の言葉では「あいつは味がないうまいやつだ」という。

また、標準語でも「においが我慢ならない」という。

このように、味覚嗅覚は社会性につながっている。感覚的に開かれているとは社会的であること的前提条件である。

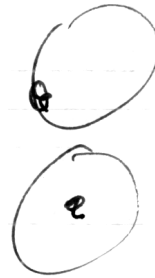
社会性は脳の一番深いところにある嗅覚味覚とつながっているのである。そして、視覚、聴覚、触覚、平衡感覚が感覚統合(バランスをとって統合されてい

く)していく。このためには芸術教育が欠かせないものである。

<芸術教育>
スライド2)



2歳の絵



3歳の絵



4歳の絵

こういう模様はひとりではできてくる。生まれながらに人間は芸術家である。歌、踊りに関しても同じことが言える。

音（インターバル）の5度は3：2の関係である（音の振動数の比のこと）。子どもはテンポを数えるということの中に特に知性を発達させるものを持っている。現代の音楽療法でわかっていることは神経を発達させる一番良い刺激はモーツァルトかバッハであるということ。ドイツのマインツでなされた研究から、4年生まで古典音楽をした場合はしない場合より知性が発達したということがわかっている。音楽は凍れる数学なのである。（音楽が生きた数学法則だというような意味。）

また、思春期以降の犯罪者は言語能力が小学4年生並であることがわかっている。 sacramentのコミュニティースクールの先生たちが、犯罪を犯した子どもたちの教育に対して、この観点をを用いる試みをした。（そのためにシュタイナー教育の言語と音楽教育のプログラムを採用した。）夜は刑務所において、昼間は看守に付き添われて更生のために学校へ通ってくる子どもたちにリコーダーと美しい詩が用いられたのである。子供たちは最初はあざ笑っていたが、だんだんと熱心になっていった。学年末の発表で親にプレゼントした時は、親は涙して言葉にならなかった。

<暴力性 攻撃性 平和教育について>

暴力性攻撃性をどう防ぐことができるかということ。先日見たビデオ：夜中の2時にパーティーから帰ってきた夫に対して妻が少し批判をすると夫がそれにやりかえし、どんどんやり取りがエスカレートして喧嘩になってしまうという内容。これに示唆されるように、攻撃性とは言語コミュニケーション（言葉）を失った状態である。言葉で表現することができる間は暴力はない。

小学3年4年では取っ組み合いの喧嘩は全く普通で好んで行っているが、健全な発達を遂げた思春期の子どもは言葉でやりあうし取っ組み合いをするときはゲームとして楽しんでいる。大人は好ましくない場合「今君が言ったことだけど、ちょっとひどくないかな。君のような人間とは一瞬たりとも一緒にすごせない。」という。ここには精神的対決があるが感情ではない。このように言葉を学習することは平和教育になるのである。

だからシュタイナーは、シュタイナー学校を卒業する生徒たちは 12 の宗教 (12 の異なる考え) を理解できるようになっているべきだと語っている。自分のうちに多くの異なるものを有している人間は、平和への理解をも有しているからである。

<最後に> 子どもは少なくとも 1 人の大人を必要としている。瞑想的、宗教的生活を送っている大人が側にいる必要がある。自分自身を霊的・精神的に導いてくれることへの尊敬が、自分の尊厳を大切にすることへと繋がっていく。このことは私たちが民主的になることの助けになる。神の前で私たち大人は子どもと比べて、生物学的にほんの少し大人であるに過ぎないのであるから。

また、子どもたちが受け入れられたと感じるのは、大人の中に自分よりほんのちょっと先の子どものを見たときである。どちらも途上にあるという点では同じ存在である。

この視点に立つと、子どもから多くを学ぶことができる。たとえば、世界に対し身を捧げる態度。すべてを許す態度。生きることに喜びを感じ、自分から何かを見つけていく態度。驚きの感覚。こういうことによって、私たち大人も新しい経験に気持ちを開いていく事ができるのである。

< 質疑応答 >

Q1 : 子どもが反抗期 14 才のとき大変だった。思春期にはいるとき大人はどう対処すればよいのか。

Q2 : 一つは医学的治療 (子ども時代) について。二つ目は 3 才の子どもの強制しないようにしたいがしつけとのかね合いはどうすればいいか。

Q3 : アライアンスとしてヴァルドルフ教育以外の人と一緒に活動しながら、ヴァルドルフ教育をしていらっしゃる方がどうイニシアティブをとっているのか。

Q4 : アライアンスの具体的活動について知りたい。

Q5 : 3 才まで子どもが守られていないで成長した場合に、4 ~ 7 才の子どもに対しどう取り組みたいのか知りたい。

A : まず Q5 から。3 才まで子どもはもっとも敏感で傷つきやすい。前に子どもの施設のために話したことだが、保育所や施設に CD、TV はあってはならない。一日中音楽があってもならない。人間の語りかけ、人間の歌、仕事、現実の素材という仮想でない場が必要である。

もしあなたに余裕があるなら、自宅で一日に数時間そういう場所を提供することができる。新聞で紹介されれば、すぐに反応が返ってくるだろう。一番いいのは、地域の児童施設と連絡を取ること。地域のどこで一番助けが必要なのか知り行動することができる。あるケースの場合、まず、最初一年は子どもが家庭に戻って過ごす事を始めた。そして、別の家庭が開放された場を提供し、そこへ母親が仕事をしている日中が子どもを預ける。これが Q4 の答え。

虐待された子に対して : 結びつきの研究から明らかになったことは、虐待のように関係性がうまくいってない時、治療は傷ついた子に対して正しい関係を作っていくということ。親と子の関係から子どもを引き離すとか虐待をなくすとかが可能とは限らない。そういう場合の治療とは、学校の授業を通して健全な関係を作っていくことである。そうすると、

そこから逃れたり正しい関係を作っていったりすることができるようになる。(Q5の答え)

正しい関係には3つの基本的基準がある。

- 1) 関係性は正直で無ければならない。(誠実)
- 2) 関係性は愛に満ちたものでなければならない。つまり、自分があるがままの状態で愛されているということを子どもが感じられなければならない。子ども自身がいつかできるようになることを期待している、ような愛は期待と理解に満ちているものである。あるがままで愛され好かれているというのが良い。
- 3) その人自身に対する自立性(尊厳)への尊敬 (Q1Q2の答え)

中部ヨーロッパでのアライアンスの活動はホームページに載っている。

年間テーマを作っている。昨年のテーマは「コンピュータ」だった。(FoolsGoldという本参考)

今年のテーマは「おもちゃ」。

様々な地域でテーマを選ぶこともありうる。バーゼルでは年に一回11月にこどもの日をやっている。子どもについて発言できる人を1人呼んで来て子ども公園で感覚を働かせることができるようなことをする。子どもの為のフォーラム、父母のフォーラムなど地域の人々が関われる様々なフォーラムを行っている。

ベルギーのブリュッセルで国際会議があったが、その時の参加者の女性の夫がテレビ局のオーナーだった。その関係で5月から始まる「子どもの村」がテレビで報道される。そこは虐待された子どもやストリートの子どものたちが過ごせる場所である。体中傷だらけの子どものたちが数年たつと変わってくる。それに関する私の願いはそういう活動に是非ヴァルドルフの幼稚園の先生にかかわってもらいたいということ。このプロジェクトに参加できる幼稚園の先生をさがしています。フィリピンです。参加できる幼稚園の先生は上松さんか私か高橋明男さんまで連絡下さい。少なくとも3ヶ月。理想的には一年間関わって欲しい。(Q3の答え)

これですべての質問にお答えできているとおもいます。

了